



Title	幕末西洋行と中国見聞（一）
Author(s)	松沢, 弘陽; MATSUZAWA, Hiroaki
Citation	北大法学論集, 38(5-6上), 171-203
Issue Date	1988-07-20
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/16597">https://hdl.handle.net/2115/16597</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	38(5-6)1_p171-203.pdf



幕末西洋行と中国見聞(一)<sup>1</sup>

松  
沢  
弘  
陽

目次

はじめに

I 西力東漸のあとをたどる (以上本号)

II ヨーロッパの中の中国

むすび

## はじめに

徳川幕府は、万延元（一八六一）年、日米通商航海条約批准のために新見正興以下の使節を初めて外国に派遣したのを始めとして、幕府統治最後の八年の間に、七回にわたって欧米諸国に使節を派遣した。

文久二（一八六二）年、開港・開市延期交渉と西洋事情探索のため、竹内保徳らをヨーロッパ六国へ。

元治元（一八六四）年、池田長発らを横浜鎖港交渉のためフランスへ。

慶応元（一八六五）年、横浜製鉄所建設等の準備のため、柴田剛中らをフランスへ。

同二（一八六六）年、国境画定商議のため、小出秀実らをロシアへ。

同三（一八六七）年、軍艦購入交渉のため小野友五郎らをアメリカへ。

同年、徳川昭武のパリ万国博訪問とヨーロッパ巡遊のため、首席随員・駐仏公使向山隼人正以下をフランスへ。

幕府は、これと併行して、欧米諸国に留学生団を送った。文久二（一八六二）年オランダへ、慶応元（一八六五）年ロシアへ、同二（一八六六）年英国へ、同三（一八六七）年フランスへ、がその主なものである。

他方幕府に対抗する薩長両藩も、長州藩が文久三（一八六三）年いち早く英国に留学生を密行させたのを皮切りに、薩摩藩は慶応元（一八六五）年・二年の二次にわたり大規模な使節・留学生団をヨーロッパとアメリカに密行させ、同三（一八六七）年のパリ万国博には岩下左次衛門ら藩独自の使節団を送って公然と幕府の権威に挑戦した。慶応二年幕府が留学・渡航の禁を解くや、福岡、佐賀、金沢、熊本、徳山、仙台等大小の諸藩が競って留学生を送り出した。

このような使節と随員・従者あるいは留学生たちのほとんど全てにとつて、西洋行は、西洋との最初の出会いであるとともに、中国との最初の対面の機会でもあった。彼らがあいこいで西洋に向かったこの時期に、西洋の圧力によつて

開国した中国と西洋世界との交渉は、両面において変容しつつあった。一方では、中国本土諸港特に上海と香港での西洋諸国との貿易やキリスト教伝道が活発化し、他方では、人口圧力と戦乱のために、大量の中国人が移民・苦力・亡命者等として国外に押し出され、南北アメリカの太平洋沿岸と東南アジアの多くの港と後背地の中国人社会を膨張させ、また新たに形成していた。西洋勢力が中国に侵入する反面で、中国人は南北アメリカ諸国と、ヨーロッパ諸国の西力東漸のあとである諸植民地とにいわば逆流していったのである。あたかもこの時期、日本から西洋に渡る船旅は、多くの場合、上海・香港をふり出しに西力東漸がもたらした諸港を乗りついでゆく旅だった。こうして西洋を旨ざす日本人は、寄港地ごとに、また長い航海の船中でも、さらに目的地である西洋でも、中国および中国人と、あるいは期待した交渉をもち、あるいは思いがけぬ出会いを経験した。こうして一八六〇年代を通じて、日本人の西洋行は、その副産物として初めての中国経験をともなっていた。それは、貿易や情報収集のための上海渡航を別とすれば、同時期の唯一の中国経験の機会であり、その規模においても前者に匹敵するものだった。

一八六〇年代の西洋行を通じて、彼らの西洋観は一変したのだが、それは彼らの中国観の変容をともなっていた。彼らの多くは帰国後、明治新政府成立の後にも、外交を始め政府内外の諸分野で重要な役割を演じ、彼らの発言や著作は、日本人の世界像が、中国や日本を中心とする華夷秩序的なそれから、欧米を頂点とする「開化」の段階的なそれへと転換するのに寄与したのである。

このプロセスのうち万延元年の遣米使節団の中国経験を扱った前稿をうけて、小論では文久二年の遣欧使節団から明治四(一八七二)年の日清修好条規締結にいたるまでの期間に西洋に赴いた使節団・留学生のメンバーの中国および中国人との出会いと中国観を示す記録の一部を、I 西洋本国から東洋への植民地と条約港という西力東漸の連鎖をたどる途上で、II また西洋本国にいたっても、中国に出会うという場に即して紹介し、一応の分析を試みたい。そこでの関心

は、彼らが、どこで何を見聞したか、それはどのような視角から、あるいはどのようなメディアを通してだったのか。またそのような見聞を何に参照しどのように解釈したのかである。またそのような分析の上で、彼らの中国観さらにはその枠組をなす世界像の変容、またそれらを前提とする対中国政策の構想に及びたい。

## I 西力東漸のあとをたどる

### 1 条約港上海にて

この時期に、西廻りでアメリカ東部に渡るグループまで含めて、西洋を目ざす人々の多くが最初に寄港したのは上海だった。アヘン戦争での敗北と南京条約によって一八四三（道光三）年に開港して後、すでに英・仏・米租界が各国人居住の特別地域として設定され、一八六三（同治二）年には、英米両租界が合併して共同租界を形成した。上海は中国とヨーロッパ本国とを結ぶ商業航路の終点として、英仏両国の本国から東アジアに延びる植民地と条約港の連鎖の末端となり、六〇年代には既に広東を抜いて中国における最大の貿易量を記録していた。租界には各国の商社が立ちならびその間に領事館やホテルや教会等が見られた。この租界の南には県城を中心にして古くからの中国人の上海がひろがっていた。道台や知県の官署がおかれた県城に代表される古くからの中国と、租界に象徴される中国に食い入った新来の西洋勢力と、中国側の表現に従えば「城裡」と「夷界」とに代表される二つの世界がきびしく対峙しつつあい交わっていた。しかも太平天国軍が揚子江デルタを制圧するにいたって、膨大な難民が「城裡」から溢れ出して租界に流入するにおよんで、租界の官憲はこれら中国人に対して権力を行使するようになり、さらに、太平天国軍に対抗するため県城内や城外にまで各国軍隊を駐屯させるなど、中国に食い込んだ西洋勢力が中国をその中に取り込む状況が現われていた。

また中国の内部では、一八六〇年代、いわゆる同治中興の時期を通じて、上海は洋務派の形成の最も有力な基盤となり、曾國藩や李鴻章らの下の道・県レベルの官人の間に新しい動きが始まっていた。幕府や諸藩の士人は、日本を出て始めてこのような上海に寄港し、船待ちをしてヨーロッパ行き便船に乗り、帰路にも同様に、暫くの上海滞在をすることになった。

彼らがそこで何を、どのような角度から見聞したか。總括的な上海見聞記の一例として、このような旅行者の中で上海滞在を最も多く重ねることになった幕臣杉浦愛蔵の手記の一節を引こう。

「二月」六日晝、揚子江口に達す、江広くして涯限なく、蒼波渺茫たり、三時吳淞江に抵り（陳化成戦死之故跡）五時上海に抵り下碇す、七日上陸して英の客舎に止宿す、此間……上海遊歩の事有、客舎江に臨み風致尤佳、一目千里にて帆檣の煙に連り、旗旛の風に靡けるを見て通商の盛なるを知り、西人南客一食して歡語相接するを聞く、通信の実なるを覚ゆ、此江水深くして、巨艦を岸際まで容るるに足れり、碇舶の船凡五百艘はかりもありと聞り

上海の瀕江の地、皆外国人居留し、青櫺白壁相列り、頗る稠密たり、内地の人家も接続して商業盛なりと見ゆ、城周囲瓦牆にて九門四衢に通し、街路棋局のごとく分れ、内地の人烟鬱々として雑沓甚しといへとも、矮屋低檐櫺比狹隘、飲肆肉店臭氣鼻を穿ち、不潔尤甚し、鑿門は仏の兵にて守り、税館有、英の士官を雇て管す、壬寅の後名は所轄に属すといえとも、其実は英仏版籍に入しも同然なり、尤商法は外国人に托せしより遺漏尽く補ひ客歲税額凡四百万弗にいたれりといへり」<sup>(2)</sup>

なお、同じ筆者がこの上海滞在中、父に宛てた手紙の一節。

「正月六日漸く吳淞江ニ入り上海にいたり、翌人々一同上陸いたし申候、……此地道光壬寅阿片之乱より陳化成討死し、其後漸く開け此節ニ而は外国人居留之鉅館建連り、船艦凡五百艘計も入津いたし居、繁華之地ニ相見へ候、旅

宿ハ英人之旅店ニ而頗る大厦相応奇麗ニ有之、食物等牛豚、雑魚其他色々之美味あるも宜敷、翌八日処々遊歩いたし候、支那市店江も参り候処、西洋人之住宅ニ比すれば仙凡の相違あり、乍然看板其外も至而文雅ニ相見へ、日本人を珍らしかり数百人口々にシャーハンニス即日本人といふ事なり唱へ付歩行、筆屋、本屋等も皆筆談ニ而相分り申候、群聚いたり候ニ付鞭を揮て払い候へハ、稍退き又々来り始と蠅之如く当惑仕候、支那ハ懶惰愚陋にして英仏人に賤仕僂辱さるる事甚し、英仏之東洋に志を専にする事恐るへし」<sup>(3)</sup>

揚子江を遡つて黄浦江に入り、上海に滞在する間、人々の眼前には中国の明暗さまざま側面が姿を現す。彼らの多くが先ず目をこらし、感慨にふけたのは、アヘン戦争に奮戦して斃れた勇将江南提督陳化成の故地、吳淞砲台の廢墟である。会津の儒者佐原盛純は、フランス行の往復いずれの記録にも陳化成をしのんで「覚エス慨然涙セリ」<sup>(4)</sup>、また「陳化成戦没ノ処今其墳墓アリト云フ恨ムラクハ弔スル事ヲ得サルナリ」<sup>(5)</sup>と記している。アヘン戦争において、「聖人の道」が行われているはずの中国が「洋夷」に敗北を喫したことは、同時代の日本に大きな衝撃を与え、さまざまな書物が著された。暗君と悪政のゆえに蛮夷に敗れ国運傾くという中国像が、日本の識者の間にひろまり、逆にその暗黒を背景に林則徐や陳化成の誠忠勇武が一層光を放ち、讃仰されたのである。従つて陳化成の忠勇の追憶は清朝官人の頽廢への批判と結びついた。

「さしも広大に築きたる砲台の荒廢して、夕陽啼鳥いと物淋しく、当年巨砲轟天燄煙蔽空、清英両国道光壬寅の戦に陳化成の忠勇なるも、栄尽き計窮り竟に討死せしを追懷すれハ、廟廊の官吏御旗の道を謬り、懐柔の義を忘れ傲慢自ら尊とし、疎暴失挙数年の兵禍を招き、添毒生空に蒙らしめ堂々故国僂辱を水国に受く」<sup>(6)</sup>

さて訪欧の日本人旅行者を乗せた船は、大抵英国租界の「バンド」の前に錨を下し、一行は、租界内の欧米人経営のホテルに投宿する。彼らは、欧米の商社の社員か領事館員をエスコートのようにして租界内を見物し、幕府の使節・

留学生団の場合には各国領事と表敬訪問の交換をすることもあった。

しかし上海を訪れた日本人で、西洋世界への知的関心に富む人々が、上海の西洋人世界のうちでとりわけ強い興味を示したのは、租界の内外にわたる、西洋人宣教師の経営する出版や教育の施設だった。幕府のパリ万国博派遣使節の随員洪沢栄一の日記は、彼らの目に、在中宣教師の活動がどのように映ったかを示して興味深い。

「此の地佛國の教師支那の風體となり講堂を開き教誘する者あり亦歐人の支那學を研究する爲め設し書院もありて都て歐人の東洋學を修行する者皆教法の人にて其國の教法の由来する所を推し究め考證の資とし且其教を弘めんとせるより其宗旨の積金より修行の入費を出せるよし」<sup>(7)</sup>

洪沢はおそらくそのちがいを知らなかつただろうが、この文の最初のセンテンスはカトリックの、その後はプロテスタントの伝道の特徴をよくとらえているようである。中国への伝道においてはカトリックが先んじており、南京条約締結後いち早く布教を再開していた。洪沢らが訪れた「仏國の教師」の「講堂」は、おそらく上海西郊徐家匯に再建された一七世紀末の天主堂「老堂」と関連の施設だろう。ここは江南におけるイエズス会の根拠地であり、やがて日中関係の舞台にも登場する洋務派のすぐれた知識人馬相伯・馬建忠兄弟もこの地に設けられた徐匯公学に学んだ。そしてカトリックの宣教師は、早くから中国服をまとい中国語を話して、中国人の間へ、中国の内陸へ積極的に入りこんでいった。これに対してメドハースト (W. H. Medhurst 麦都思)、『シユマヘツ』 (W. Murhead 慕維廉)、『ワイリー』 (A. Wylie 偉烈亜力) (以上いずれもロンドン宣教会—London Missionary Society)、『ブリジマン』 (E. C. Bridgeman 裨治文—アメリカン・ボード) らを送ったプロテスタントは一步出遅れて、この時期には、彼らの伝道活動の主力は伝道の基礎づくりとしての文書の出版におかれていた。それは、聖書のみならず西洋世界とその文明全般を、中国語で中国人の思考に即して紹介し、他方中国の社会と文化を英語で母国に知らせるといふ両面の作業であり、ここに 'missionary

sinologues」ともいふべき学者とそのおびただしい著作が生れる。<sup>(8)</sup> とりわけ、ミユアヘッドの『地理全志』、『大英国志』、ブリジマンの『联邦志略』、さらに英米宣教師の中文雑誌『六合叢談』と『中外新報』、上海在住英米人の新聞『North China Herald』の中文版といふべき『上海新報』等々、いずれも日本国内で広く流布し、右記の中、『地理全志』から『中外新報』までは、官版を含めてさまざまな日本版が刊行されるにいたった。これらの中国風に表記された著者たちの名前と書名は、日本の識者の脳裡で、上海という土地や、墨海書館 (London Missionary Society Press)・美華書館 (American Presbyterian Press) 等の出版組織の名と結びついていた。こうしてたとえ、幕府の英国留学生団取締役として渡英した聖堂御儒者中村敬輔は、その遙か前にメドハーストの詩経英訳を読んでいたし、<sup>(9)</sup> 上海を訪れたとくに英字系の知識人は、何をおいても彼の『English and Chinese Dictionary, 2 vols, Shanghai, 1874』を求めようとした。元治元年の池田遣使使節団も、最初の寄港地上海のあわただしい滞在の間に、『漢英対訳辞書』(メドハーストのそれだろう)一冊、『漢英対訳四書』(香港の項で見るレッグのそれか)一冊、『数理精蘊』七二冊を、『陸軍所』のために買い入れて送り出している。<sup>(10)</sup> そして英語を知らぬ人々の中には、『地理全志』のような書物を西洋行の船中にも携えて読み、西洋に着く日に備える者もいたのである。

日本人旅行者はさらに県城を訪れる。彼らにとって先ず、租界内の洋風建築、ガス燈による照明、道路や下水を始めとする公衆衛生の整備と、県城内の商店・住居・街路や人間の不潔不衛生と、そして租界の秩序と県城内の無秩序との対照は大きな衝撃だった。

彼らの多くに共通する「城裡」訪問の動機は、古書や筆墨など、日本で古くから珍重された来た中国の伝統文化の産物を購うことだった。幸い筆談のおかげで用を足し、上海事情などを尋ねることも出来た。しかし、『彼下賤の民と雖も稀に最も能書あり。文化の国驚入候』<sup>(11)</sup> といった高い評価はまれで、むしろ「尋常の品のみにて奇品なし」<sup>(12)</sup> という期待は

ずれの声がふつうである。

使節や留学生団が幕府のそれである場合には、ヨーロッパの行先国の領事に公式訪問をするほかに、上海道台との間に表敬訪問が問題になることがあった。歩兵頭並川路太郎と聖堂御儒者中村敬輔を取締役とする幕府最初の留学生団は、これに積極的だった。両取締役の道台訪問の様子を川路の日記にはこのように記している。

「往く往く彼の上海城門に到り、第一門に入る。これは江戸なれば浅草見附位の處と思へり。門の形孤の如くにして内には隘路あり。兩傍貧市あり。凡そ先づ東海道水口城下町位のものなり。その狭く汚きこと嘆息すべし。城門を過ぐる兩三四にして……中門に入る。これにて下輿す。此處は支那の官舎なり、一人出迎へたる支那の吏あり。是れ上海の道臺なり。道臺は鎮台と均しきものにて、其位三品、蘇州松江の二省を支配するものなり。道臺に伴はれて前殿に到る。……吾ら四名道臺と爰に話せり。此行は一體中村敬輔支那學者なりとて教師、道臺と遇はしめんとして今日出行したるなり。且つ敬輔、安井仲平の著述『管子纂註』を漢土に廣めんと持来りたり。有暫つて右『管子纂註』を出して道臺に贈る。道臺深く感謝の體にて歡語筆談せり。僕特別に贈物なきも不偏なる故偶々持来れる浅野中書氏（一長祚）の書畫數枚を道臺に贈りたり。彼多謝して曰く、他日拙作一篇を以て謝せんと云ふ。道臺姓名は應寶時、人物至つて温和なり。暫くあつて又奥殿に伴ひゆく。酒食を饗應せり。終つて新出の詩文集五巻を贈りくれたり。今日同行したる英の書記官は甚だ清音を能くし且つ漢詩文をも成せり。本日筆談のほか教師などの通辨は右書記官之を成せり。承れば北京に五年在留して學びたるよし。」

文中の「教師」は一行に付添つた英国海軍のL・W・ロイドであり、彼の報告によれば、一行が應寶時に贈つた安井息軒の『管子纂註』は聖堂教授方一同から托されたものだった。日本の儒者の、伝統的学芸の先達としての中国の官人に対する敬意が、彼の好意によつて応えられ、和やかな交歓が生れる様子がうかがわれよう。あわせて注目されるのは、

英国領事館の「書記官」が中国語に通じ中国の詩文もよくすることへの、幕府高官の家に育ち漢学の素養も豊かな筆者の驚きである。やがて見るように、この驚きは他の漢学派知識人にも共通するものであり、旅を重ねるにつれて一層強まってゆき、ついには中国や日本における学問や文化のあり方への反省をも促がすのである。

この訪門の二月後、徳川昭武以下のパリ万国博派遣使節団が上海に到着する。到着早々に米仏両国の領事や提督たちの表敬訪問があり、その後上海道台の下僚が道台の代理として表敬に訪れた。これについて使節団の調役杉浦愛蔵は、この経緯とそれについての彼の所見を次のように記している。

「上海道台支配局張秀眞、陳福勳来り、道台名札並銘々名札を出して御起居を伺ふ、兩人とも身分卑しかれば、上官は謁せるを敢えて乞ハされとも、単人正、石見守面会して来意を謝す、道台は疾あるにより親しく趨問せることあたはず、何なりとも相応の用事あらは周旋せんといえり（通詞は仏のコンシユル所士官を雇えり）」

此事よりも答礼等ゆくへきところ、出帆前事故答礼は其暇なく、此方名札を遣り、答辞も申述へり

（細書）支那自尊因陋の風習は従来より久しく已に他邦の官吏本地に着せるとも、尋問いたささるとの命令、北京政府より下せしよし、されと美仏其の他の国々のもの差出し、其礼典を存せるよし、此度も美国コンシユルより日本の貴族到着せるよしを告げしにより、道台は疾に托して来らず、張、陳二人をして来らしめしと思はる、自ら礼義の国と称しながら、却て外国人に教督せられ、無余儀礼典に従事せるは可笑至なり<sup>15</sup>」

ここに言う「上海道台」は、二月前川路・中村らと交歓した應寶時と考えてまちがひなからう。この記述の中から浮び上つて来るのは、道台についての、「自尊因陋」ゆえに外国使臣に対して意図的に欠礼して来ながら、西洋の外交官に外交儀礼を教えられて小策を弄し、属吏を使つて体裁をとりつくろつていふのだという認識と軽蔑である。またそのような認識と評価がアメリカかフランスの出先外交官の説明を通して形づくられているらしいこともうかがわれよう。中

村敬輔や川路太郎らと杉浦愛蔵や渋沢栄一らと、清朝の同じ地方官に対するこのような態度と評価の差異はどうして生じたのだろうか。またこの道台の行政官としての政治的判断や行動の能力——特に日本の对中国態度についての——の実態はどうだったのだろうか。小論のむすびで、それを解く一つの手がかりが与えられるだろう。

洋行グループは、いうまでもなくもともと欧米を目ざしており、上海滞在も日数が限られていたが、その中には上海の中国人との間にショッピングや見物あるいは公式訪問以上の深い交流をもつことが出来た者もいた。元治元年の遣使使節団に池田正使の従者となつて参加した、既にその日記を引いた会津の儒者佐原盛純と、調役田中廉太郎の従者として志願した浜松藩の儒者名倉予何人<sup>〔あなど〕</sup>の二人である。佐原の日記によつて二人の行動を見よう。

「午後ヨリ当地貴官ノモノヲ訪ハントス同行名倉氏ハ三年前此上海迄来リシ人ナレバ此人ノ知已ナリトテ案内セリ……溝辺ニ枕セシ巨宅アリ外門内ニテ喝セシニ小兒一人出テ来レリ名倉氏筆シテ授ケシニ暫アリテ男子一人出迎ヘ揖シテ我輩ヲ導ケリ内門ハ石造リニテ美麗ナリ遂ニ我邦ニテ申セハ表書院トモ云フベキ処ニ通レリ……我輩並当家ノ主人又ハ伯父類一兩名来リテ腰ヲ掛ケリ筆話シテ一應ノ挨拶等畢リ蓋茶碗ニ茶ヲ汲ミ来ル喫シ尽セハ又来リテ服メリ兩三回筆話シ殊ニ名倉氏ハ知已ナレバ尤モ談話モアレリ其内ニ温飩……ヲ茶碗ニ盛り来リテ出セリ畢リテ例ノ熱湯ニテシホリシ手拭ヘヲ持チ来ル即面を拭フニ……甚タ清涼ヲ覺ユ遂ニ我輩ヲ導キテ堂中ヲ周覽セシム処々ニ九尺四方或ハ二間餘方モアル庭園ヲ造レリ……彼是セシ内日毛漸ク傾キ路程亦遠キ事ナレバ袂ヲ分テ辞セリ」<sup>⑬</sup>

日本の二人の儒者が訪れた、上海県城外の「貴官」の邸は、彼らの同僚が口を揃えて罵る、悪臭が立ちこめ汚水が街路に流れ、不潔で狡猾な支那人が蠅のように追つても追つてもつきまとうという、県城内とはほとんど別の世界である。そして名倉らの訪問は、同行の日本人の中で彼らが中国の社会と人の中にどれだけ深く入りその内側を見ることが出来たかを象徴しているといえよう。佐原盛純はこの記入のすぐ後で、ここに登場する「貴官」の名を王仁伯と記している

が、それは、名倉予何人がこの二年前、幕府の官船千歳丸の一行に、御徒目付鍋田三郎右衛門の従者として加わり、上海を訪れたおりに深い交わりを結んだ王互甫という紳士らしい中国人と同一人物のように思われる。名倉は二ヶ月の上海滞在中に知った王互甫と時事を論じてたちまち親しくなり、頻繁に王の家を訪ね、大抵その弟や叔父も同席して、筆談で談論し、また王互甫によつて上海の志ある紳士に紹介されたのだった。前回の名倉と王互甫兄弟およびその叔父との、また今回の名倉・佐原と王仁伯およびその「伯父類一兩名」との交わりは、儒教文化と時局への慷慨という共通のきずなによつて固くされていたように思われる。

さらに、西洋への旅を急ぐ日本人武士の中には、伝統文化や旧体制末期の混乱や頽廃とはちがう、中国社会内部の新しい動きの一端にふれた者もいた。川路太郎が、市内見物の路上で数人の中国人に取り囲まれ、「今日上海城中有礼拝請日本人着見」と書いた紙片を示されて、行くことは出来なかつたけれども「甚日本人を慕ふ情可憐なり」と記しているのは、おそらく中国人キリスト者から「天主堂」での礼拝に招かれたのだろう。また慶応二（一八六六）年、薩摩藩の第二次アメリカ留学生として英国經由でアメリカ東部に向う途中上海に立ち寄つた、五人のグループのリーダー格の仁礼景範は、その「航米日記」に、「唐製作所江行、機械感心、亜米理幹人唐人ヨリ被頼又ソコニテ酒杯出シ、甚ウレシク様子相見得、我々共子共ノ様相考見請残念也」としている。その場所やアメリカ人との関係から推して、この「唐製作所」は、前年同治四年、两江總督曾國藩の支持のもとに、江蘇巡撫李鴻章が上海道台應寶時の協力をえて、アメリカ人経営の工場を買収し、アメリカから機械を買入れ、アメリカ人の監督の下で始められた、江南機器製造總局だと思われる。そうだとすれば、アメリカを目ざす薩摩藩士の一行は、おそらく彼らに同行した長崎在住のアメリカ商人の斡旋によつて、上海に胎動した洋務の最先端に接していたのである。

このように西洋行に加わつた関心や中国についての既得の觀念のちがひ、また西洋行グループ内での立場のちがひや

上海滞在の長短によつて、上海の中国人とその社会に、どのような角度からどれだけ深く入ることが出来たかには、個人差が大きい。しかし總じて、限られた期間に様々な衝撃的な経験を重ねた後に得られた、總括的な判断は、次のような記述によつて代表されていた。

「歐人の土人を使役する牛馬を驅逐するに異ならず督呵するに棍を以てす我曹市中を遊歩するに土人蟻集して往來を塞ぐ各雜言して喧しきを英佛の取締の兵來りて追拂へば潮の如く去り少く休めば忽ち集る其陋體厭ふべし東洋名高き古國にて幅員の廣き人民の多き土地の肥饒産物の殷富なる歐亞諸洲も固より及ばざる所といへり然るに喬木の謂のみにて世界開化の期に後れ獨其國のみを第一とし尊大自恣の風習あり道光爾來の瑕釁を啓き更に開國の規模も立てず唯兵威の敵し難きと異類の測られざるを恐るるのみにて尚舊政に因循し日に貧弱に陥るやと思はる豈惜まざらむや」<sup>(19)</sup>

「尊大自恣」やそれに類する表現は、多くの日本人旅行者によつて、清朝の統治の中央から地方末端にいたるまで深く滲透した中華意識の現われとしてとらえられている。他方「世界開化の期に後れ」るか追付くか、という切実な問いは、華夷觀念をこえる新しい世界像と歴史意識の萌芽を示していた。

## 2 英国直轄植民地香港にて

西洋を目ざす日本人の多くにとつて、香港は上海の次の寄港地だった。彼らはここで暫く碇泊したり、船を乗り換えたりする。他の者にとっては香港は横浜や長崎を出て初めての中国である。「香港に着きて目を驚かせしは支那人を見たりしなり」<sup>(20)</sup>。すでに日本国内で西洋人と交わつて來、関心が西洋世界に集中している者にとつては、初めて中国人に接し

たことが驚きだったのだろう。一八四三年、南京条約によつて英国に割讓されて直轄植民地となり、大英帝国の政治的軍事的基地、東アジアの前哨となつた香港は、自由港としても急速に発展しつつあつた。香港を訪れる日本人旅行者の記録には、このような香港の姿がかなりの確にとらえられているが、すでに上海を見聞して来た者は、しばしば上海との対比で香港を測る。香港における西洋勢力は、貿易では上海に劣り、軍事では上海に勝るといふのが一般的な印象だつたようである。<sup>(21)</sup> また、日本の港を出て香港に直行した者の中でも、万延元年の遣米使節に加わつて香港を訪れたことがある者は、現在の香港をかつての香港と比較したし、それ以外でも、往復ともに香港に寄港した者は、その間の香港の変化に目をみはつた。彼らは急速な変化の中に世界の歴史の動向を感じとるのである。例えば、幕臣益頭駿次郎は、万延元年の遣米使節団随員として、帰途に香港を訪れているが、二年後には遣欧の竹内使節団随員として再び香港に立ち寄り、このようにのべている。

「香港昌盛は一昨申年亞米利加国へ航し歸艦により亞弗利加洲喜望峯を越し呱哇島にかり支那香港え入港す上陸なせしに海邊人家櫛比稠密せしと覺しに、此航海に猶香港え上陸す街中の様子又觀覽せしに山手の方麓は悉く切崩し石を以つて垣を築作し新家夥敷西洋法に倣ひ年増に値増し繁昌盛大地となり唯此の港に入之船舶租税之なきか故也」<sup>(22)</sup>

同じ人物が帰国の途中香港に寄港してその間の變化に驚く。

「香港は當正月六日に入津せしより凡一カ年過ぎ再同港に入港しけるに追々人家相殖へ日々繁盛相増候様子にて新規築作の家夥敷相見へ其内にも未だ山を切崩し新道を付け新地を開き候由皆他国より移住成す人民と相見へ候從て開港盛に相成港内には各國の商船或は軍艦とも夥しく碇泊し帆船檣林木の如くに連り出入の船は帆開き駛違帆陰は白雲かとあやしまる其盛なるは港内諸税を省き自由に商賣をなし得る故のよし」<sup>(23)</sup>

香港のこのような變化を、ある者は世界の歴史の動向を現わすものとして解釈していた。たとえば杉浦愛蔵は、香港滞

在中に父にあてた手紙で「香港は英領ニ相成候より風氣大ニ相開け、此節ニ而は人煙稠密、屋宇潔清ニ而支那之陋風相免れ、富康之景象感嘆仕候」<sup>(24)</sup>とのべ自分の覚書には……「香港ハ本地より距ること一里計にて最寄諸島環列して灣をなし、頗る良港たり、英領に属せしより、山を載て華屋を構へ海を引き石渠を通し、樓閣層々山の半腹まで連り、人工を極めて便利を計り、樹木蒼翠占源に可なり、往時寂寥の一孤島たりしも現今如此にいたる、亦宇内形勢の推移而後相固之理を見るに足れり」と記している。

香港は、英国の支配に入ることによつて「支那の陋風」から解放され「風氣大ニ相開ケ」たとし、そこに「宇内形勢の推移而後相固之理」を読みとつているのである。ここには、先に引いた上海についての總括的な記述に見られた「世界開化」という觀念に通じる歴史感覚をうかがうことが出来る。

香港の概況について、杉浦がヨーロッパ行二回の経験を「旅案内」風にまとめた文章から引いてみよう。

### 香港

「上海より凡四日路にて抵る、海路八百里なり、……港口島嶼列りて景色宜し、人家はみな山の麓より山腹にありて多くは歐洲風なり、麓の家は支那人多し、旗棹の立し山あり、島中第一の高嶺なり、碇泊の船商船、飛脚船とも多くありて、英仏とも此処にて船を替ることなり、上陸は支那船碇泊せるを待受乗り来るを雇ふへし、定価一シルリンク……なり、上陸場にいたり払ふへし、外人を見れば余分に食る故心附へし、多勢にて彼はねたることあれば河岸に居る取締の英卒に頼むへし、忽ち追ひ払ふなり、荷物ある時ハ船夫に持せ旅宿に運すへし、旅宿はホテルデ・欧羅巴、同仏蘭西杯宜し、歩行難儀なる時ハ肩輿なり、此価も旅宿に聞きて払ふ方よろし

### 見物場所

旗棹山 眺望よろし

花園

英華書院

又此地にて一週日毎に刊行する漢字の新聞紙あり、一カ年価四トルラルなり、尤送り越せる都度都度船賃ハ此方にて払ふことなり、所謂香港新聞なり

此地より広東江航する蒸氣船あり、八時間にて到るよし西洋諸洲、亞米利加洲より何れもコンシユルを置、英国より駐派せる鎮台ハ余程の威權あるものなり

歐洲諸品上海よりは価安く、支那物は白檀彫箱、蓮紙画、絹团扇、傘、象牙細工、楠箱、藤牀杯多し、何れも西洋向なり、藤牀は此地より暑強くなる故必ず買入るへし、……飛脚船乗替荷物積入の爲め一日一夜又は二日位碇泊するなり旅客此地にて熱帯を冠る帽子を買ふ、一トルラル位なり妓楼は支那人多く、歐洲人もあると聞けり、<sup>(26)</sup>

香港でも、上海の場合と同じように、同行した英国その他の国の外交官・軍人・商人などに案内されて英国経営の軍事施設・工場や商店・公園などを訪れ、幕府の使節団・留学生団の場合には、場合により英国總督や諸国領事への表敬訪問を行うのが一般的だった。各国の領事と駐屯の軍隊が、それぞれの租界の内部で、中国人に対する支配権を未だ十分にしか行使しえていなかった上海に比して、直轄植民地に組み入れられてすでに二〇年余の香港では、英国統治のもとで英国だけでなく、他の西洋諸国の中国人に対する支配も確立しており、苛酷だった。使節のフランス領事訪問に随行した従者の一人は、使節と領事との会見の様を陪席した同僚から聞いて、次のように感想を記している。

「今日御三使ニ唐通事太田某陪セシカ西洋ノ官人ハ總テ支那人ヲ奴隸ニ使フナルカ同人此奴隸(支那人)等ト應對スル互ニ盡ク英語ヲ用ユルニヨリ御使節ヨリ支那通事ノ支那人ト應對スルニ何爲ソ支那語ヲ以テセサルヤト言ハレシニ

答テ曰支那ハ大國ノ事ユエ各所ノ語音都テ二十七種有之我輩ノ學フ處ノ語音ハ此所ニテハ通シ難ク依テ英語ヲ用ユル也トソ同シ支那國中ノ人民ニテモ懸隔セシ所ニテハ語音通セサル事ノ由其巨邦タル以テ知ルヘシ<sup>(27)</sup>

彼にとつても、在中國の西洋の領事館で中國人が「奴隸」として使用されていること、また中國が「大國」であつて、数多くの方言が行われ、同じ国の内部のコミュニケーションも難かしいことは驚きだつたようである。

先の香港案内でもいふべき文章にのべられているように、香港政庁やビクトリア・ピーク、公園、商店は日本人旅行者にとつて見どころだつたし、駐屯の英國陸海軍の装備や訓練も一同を圧倒した。しかし、香港の西洋諸施設の中でも、知的な人々が早くからその存在を知つており、香港到着とともに先ずたずねようとしたのは、上海の場合と同じく、中文で世界事情西洋事情の新知識を伝える書物や新聞・雑誌を刊行する書院だつた。内戦で荒廃したとはいへ古くから県城が設けられ、地方文化の一中心だつた上海とは異なり、香港は英國領土とされるまで海浜の寒村でしかなく、土着の文化は貧しかった。「支那巷ニ抵ル左右皆清商ノ居店ニテ每家聯額ヲ以テ其産ヲ表ス……其筆勢墨痕愛スベク」といつた讚辞は少なく、むしろ「此家―ホテルに會計をなす支那人少しく文学のあるものあり予是と筆談して大に便なりされとも俗語のみなり書籍を買んとて此ものに談したれと広東に到らされハ格別の物はなし此地には俗語もの計の由也<sup>(28)</sup>」とか、「當所も僻遠の故歐文人輩更に無之<sup>(30)</sup>」といった不満や失望のことばの方がよく聞かれる。彼らの関心はそれだけ、在留西洋人の著述出版に集つたのである。そして香港での西洋人の學術活動はほとんど一つの書院によつて進められていた。先に見た香港案内にも挙げられる「英華書院 (The Anglo-Chinese College)」がそれである。日本でもかねて知られた学院だつたから、香港に立寄る使節や留學生の間には、あたかも英華書院詣でといった現象が生れた。

文久二年の竹内使節団から二例を見よう。

医師高島裕啓の日記から。

「英華書院ニ至ル館主ノ名ヲレリン（レ）レツグの誤記か？」ト云各國ノ文学ヲ習熟セシム本邦開成局ノ如シ日本和書並ニ漢籍數萬卷ヲ藏ス聖經四書ノ類皆英文ヲ以テ註脚ス其他天主教ノ諸書並ニ香港新聞識（ア）中外新報遐邇實珍ノ類皆本館ノ梓行ニ係ル館主道光十九年（一八三九年）ヨリ此ニ住スル二十年ト云フ同人ト筆語長毛が顛末ヲ記聞シ黃昏館舎ニ歸ル（五）

刊行物を通じてその存在を知り、願っていた英華書院詣でが実現した時、人々は校長としてこの書院をつかさどつて来た英国の碩学の存在を知るにいたる。James Legge 中国名理雅各。道光一九年にロンドン宣教会の宣教師として英国を発ち、翌年マラッカに著いて英華書院の校長に就任、道光二三（一八四三）年に学院とともに香港に移つて精力的に翻訳・著述・出版に従事して来た。日本には彼が編集・執筆した月刊誌『遐邇實珍』と、英中対訳で西洋文明とキリスト教を紹介する啓蒙的小百科『智環啓蒙』が流入して広く流布した。後者には官版を含めて何種もの日本版が出まわり、前者も写本で広く読まれた。日本人旅行者が英華書院を訪ねてレッグの存在を知る以前から、香港英華書院の名はこれらの書物や雑誌と結びついてかなり広く知られていた。レッグは、他方では中国の思想・文化を本国に知らせるために missionary sinologue としての研究と著作に力を注ぎ、文久の幕府遣欧使節団のメンバーが彼を訪れた頃には、すでに四書の英訳注解を *The Chinese Classics* の第一巻として世に送つていたのである。

高島のようにレッグから太平天国軍の政治・軍事情報を聞き出すのに熱心な者がいた他方には、英華書院の人々に中国の文化を共有する教養人としての関心から近づく者がいた。副使の従者で能書家の市川渡はその例である。

「又英華書院二行院ハ幅八間長十三間許ナルカ當時土木中ナリ正堂ニ入テ英ノ學人理雅各及支那人韓福田ニ會フ此所多ク英華對譯ノ書籍アリテ却テ漢籍ハ少シ、余携ヘ持シ一帖ヲ出シ書ヲ乞ヒシニ再次固辭セシカ後ニ英人理雅各（此理雅各者英國之人也）曾テ香港ニ來住シテ漢籍ヲ學フ近年著述智還啓蒙一卷アリ）天下爲一家四海皆兄弟之十字ヲ書ス

次ニ韓福田惠風和暢ノ四字ヲ書ス次ニ何廣廷揚眉吐氣四海雲遊ノ八字ヲ書セリ右何レモ筆力軟弱書法拙惡更ニ他日ノ  
 觀ニ供スルニ足ラスト雖時ニ展シテ羈情ヲ慰ス<sup>32</sup>」

市川がレツグと中国人スタッフに書を求めたのは、日本を発つに当って、仙台藩の碩儒大槻盤溪に頼まれて、書帖まで  
 托されていたからだ<sup>33</sup>。続稿に見るように、盤溪は、市川とともに遣欧使節団に加わった福沢諭吉にも、自分の著作  
 を托し、中国のしかるべき士人に贈るように、また彼らの書や著作をもらってくれるように依頼していた。

幕府のその次の遣外使節、元治元（一八六四）年の池田長発のグループでは、従者佐原盛純が、同じ従者仲間の名倉  
 予何人や高橋留三郎と共に英華書院を訪れている。

高橋名倉ト共ニ英華書院ヲ訪ヘリ……門ヲ入リシニ一書生房出テ来リ吾輩ヲ導ク遂ニ其房ニ至リ筆話ナトセシニ此  
 書院創造以來二十年ナリト云且又金陵長髮賊等当六月十五日巨魁李秀成等俘ニ就キ悉ク平シキ由ナリ此書院別ニ生徒  
 ト申スモノハナキ様子彼ノ書生ヲ王韜ト云フ外ニ隄君雅ト申モノ兩人ニテ此書院ヲ預リ居ル様子ナリ……書籍ハ漢籍  
 甚タ少シ蟹書並洋書譯文即今耶蘇教ヲ翻譯セシ旧約全書新約全書等盛ニ活板シ居シリ吾輩彼王韜ナルモノ、詩ヲ兩三  
 首乞フテ報スルニ扇子ヲ以テス遂ニ袂ヲ分テ去レリ<sup>34</sup>」

日本人訪問者の関心は、書院を預かる人々に会って書院の活動を知り、中国の内戦の情勢をたずね、彼らの詩や書を求  
 めることにあったのだろう。ここに始めて登場する王韜は、いうまでもなく植民地香港を背景にした洋務派知識人のもつ  
 ともすぐれた一人である。貧しい読書人の家に生まれ、ロンドン宣教会のメドハーストに招かれて上海の墨海書館で長  
 く編集・翻訳を助けたが、時務への関心が強く、太平天国軍と接触したことから内通を疑われ、同治元（一八六二）年  
 香港に難を避けて、今度は英華書院でレツグを助けて、「前世紀」に中国人と西洋人の間にきずかれた最高の関係の一つ<sup>35</sup>  
 と評されるチームワークをつくることになったのである。

最後に、慶応三年の幕府派遣英国留学生団の場合。

「教師（一行に付添った英国海軍のロイド）と共に生徒一同彼の有名なる香港の「英華書院」と稱する學校に行きたり。學校の先生、歳六十位の老翁、英の大學者なり。漢文清書とも能くし専ら漢學を成し居ると見えたり。何年漢書を學び居るかと問ふに、廿五年來此地に來り漢學せしといふ。この老人の著述、四書並びに書經、五車韻府等の英文と對譯せるものあり。日本の書籍も本艸の書物等數卷を並べあり。それより書籍を摺定する局に行きて見るに、大器械ありて漢字の活字（鉛なり）を備へ、奇器妙械にて一日千枚を摺立てる由、」

文久二年の遣欧使節団のメンバーが英華書院を訪れた時には、レッグの *The Chinese Classics* は、四書の刊行を終わったところだった。その後新たに王韜の協力を得て、書經の英訳・注解をこのシリーズの第三巻として刊行していたのである。そして川路らの場合は、レッグ＝王韜の中国古典研究との交渉は、香港で終らなかつた。中村敬輔は、レッグらの論語や書經の英訳・注解をロンドンまで携えて精読しようである。

「香港の英華書院の教頭英人レッグ氏は頗る漢學に通じ四書並に書經の翻譯英文になせるものあり。既にその英文の論語を中村氏今度持越したる故一覽するに首卷には程伊川昭應朱子等の傳を述べ次に論語の序文よりして委さに論ぜり。註解は大凡朱註によりたり。然し處々に古註等を引き朱註を信ぜざる説見えたり。……又譯文の序は英人レッグ氏自ら論説を述べたり、曰く、書經は疑書なりと云ふ説もあれど如此く三代の事を述べたる書は外になし。然しその中信じ難きことは採らず。唯我其善を採る而已。凡そ天下の書徹頭徹尾疑ひなきといふものはなしと云ふ。洋人にかかる漢學者出たるは日本人など困りものなりと中村話しける」<sup>37</sup>

ミッシヨナリ・シノローグの先駆レッグの儒教經典の理解は聖堂御儒者を驚かすに足りたのである。

こうしたさまざまな英華書院詣での總括ともいうべき次のような記録は、そこでの見聞が、彼らのこれまでの世界像

をゆすぶるまでの衝撃だったことを示唆している。

「香港に英華書院と唱へ學校一字在り英人と支那人と交接専ら翻譯し其書の緯は四書の内孟子論語等の書を悉く横一文に直し聖賢の教を小童に示教し勉強學做なすこと中華の人及はず唯蠻夷人中華の學を記校をなすを賞世とし餘書には六合礎談博物新編地利全志其餘の書を擧て數かたし」<sup>(38)</sup>

「英華書院其他各書院あり……英華文学上の書籍多く此の地にて刊行す英人華學を修業するもの皆勉強刻苦固より浅近にあらず其教法の由来する所を研究するため其學問の源委を考察し其治体風俗より歴代の沿革政典律令は勿論日用文章まで精究し其書を譯し其説を著し大事業を遂げるもの其人乏しからず文明の素ある人心の精神ある學術の上に従事すること乃国の強盛にして人智の英靈周密なる所以を徴するに足れり」<sup>(39)</sup>

益頭駿次郎の記した前の文章には、いくらか思い込みがあるようで事実にも多少間違いがあつた。しかし、二つの文章を通じて、「中華の学」「華学」を学び広めることにおいて、「蛮夷の人」が「中華の人」をしのぎ兩者その所を変えるという逆説的な事実が認識され、「中華」の国と「蛮夷の国」のそれぞれについてのこれまでの觀念がゆすぶられるさまがうかがわれよう。けれども英国からの「中華の学」の碩学の姿がクローズ・アップされる反面、彼と「交接」して協力する中国人の影が薄くなつてゐることも否めないだろう。「中華」と「蛮夷」の文化的葛藤が日本におけるよりはるかに厳しかった中国において、西洋宣教師に協力し、その中で二つの文明の摩擦を深くぐつた人々の間から、王韜のように中国の旧体制の改革を唱える新しいタイプの知識人が生れつつあつたのだが。

上海とは異なり、香港は中国人の社会としては新開地だつたから、日本人訪問者と中国人との、見物やショッピングの域をこえる交渉は乏しい。その中で何といつても目立つのは羅森という広東の人だろう。日本人旅行者の一部はかね

て羅森に親しみを抱いており、また彼が当時香港に住んでいることも知っていたようである。他方羅森の側でも日本の使節団が香港に立ち寄るのを知ると、彼らの旅宿を訪ねて、熱心にあるいは強引に面会を求めた。文久の竹内遣欧使節の随員市川渡は、香港に着くと、大槻盤溪に托された書帖をもって羅森に面会し、揮毫してもらっているし、同行の医師高島裕啓は、日記に「午後清人羅森ナル者来リ強テ見ヲ請フ彼レ懐中ヨリ一少冊子ヲ出シ余ニ示ス取テ之ヲ見ルニ東洋行記ト題ス先ニ殿下ニ呈セリ其譯同人ノ手ニ出ツ販ルノ白行ヲ記シテ清帝ニ献ズト云フ余幸ニ清土ノ風俗長毛ガ顛末ヲ問ヒ縷々筆語昏黒ニ去ル」と記し、日記の別冊には、薬用の広東人蔘について羅森にたずねた筆談の記録を残している。<sup>(42)</sup> 羅森はその後慶応元年の遣仏使節柴田剛中が香港に立寄った際も姿を見させている。柴田の日記によれば「旅亭夕餐会席上へ、先年亞國ペルリに隨ひ御國へ渡来せ羅存徳……入り来り、昔時ノ義杯申出、漢英対訳書一冊を贈り、私宅入来を乞へり。摸稜の挨拶いたし置。」と態よくあしらわれたわけだが、翌日には再び柴田に「著述書類七冊」を贈っている。羅森は広東の人、号何喬、広東に派遣されたアメリカン・ボードの宣教師ですぐれた中国学者のS・W・ウィリアムス（衛廉士）と交わりがあり、嘉永七（一八五四）年、ウィリアムスがペリー艦隊の通訳として日本に赴く時、頼まれて同行した。日本では、ウィリアムスを助けて日米接衝の外交文書作製に当たただけでなく、筆談によって多くの日本士人と交わり、ちよつとした羅森ブームをまき起した。帰国して後、日本への紀行と日本士人との筆談による交歓の記録を、咸豊四（一八五四）年、レッグの『遐邇貫珍』に連載したものが『日本紀行』あるいは先の文章に『東洋行紀』と記されている記録で、これも日本に伝わり写本で流布した。<sup>(44)</sup> 彼もまた中国の条約港や香港で中国の伝統文化と欧米宣教師がもたらした西洋文化の摩擦のはざままで育った知識人の一人だったのでないかと思われる。

羅森のようにすでに日本人との間に交渉があった者は格別としても、中国人から筆談を求められて深い話題にふみ込んでゆくことも、時にはあったようである。慶応二（一八六六）年、土佐藩士結城幸安とともに英国に渡った薩摩藩士

中井弘の場合。

「英岡（一コンスル）ヲ訪ヒ大石柱ノ高閣ニ至ル。支那人数名アリ。筆談ヲ乞フ。余数事ヲ書シテ之ニ示ス。其輩大ニ喜ビ一ツノ客室ニ伴ヒ茶菓ヲ供ス。余曰ク。西洋人ノ亜細亞洲ニ移住スルハ印度、支那ヲ以テ始メトナス。其交易通商ノ盛大ナルモ支那、印度、米堅<sup>ミヤ</sup>ヲ又第一トス。今日聖賢ノ大道衰へ耶蘇教盛ナリ。此ヲ捨テ彼ヲ取ル、萬民ノ為ニ是非得失ノ在ル處ヲ聞ント。支那人曰ク滔々タル天下皆是ナリ。豈獨印度支那ノミナランヤ。傷時ノ事姑ク説クナカレト。<sup>(46)</sup>」

中国人のこのような返答から、中井がどのような中国認識をもつにいたつたかは、すぐ後に見ることにした。

香港から遠くない広東は、阿片戦争の故地として日本の士人の脳裡に焼き付いていたし、日本で広く読まれた合信（ロンドン宣教会の宣教医 B. Hobson）の『全体新論』『博物新編』の刊行地としても記憶されていたからだろう、香港に寄港した日本人の中には、短かい滞在期間の間に広東まで足をのばすことを考えた者もいたようである。例えば、中井弘は香港到着のその日に広東まで珠江を遡り、水上生活民の舟にとり囲まれて、広東の印象を「厭フベシ其船ノ不潔甚ダ<sup>(46)</sup>シ」と記している。

一八六〇年代においても、日本人にとっては、上海に比べれば交渉が乏しい香港だったが、それでも中国を蚕食した英国統治とそれに服する中国人との対照は、日本人旅行者に強烈な印象を残した。香港についての、彼らの總括的な記述のいくつかを見て先に進むことにしたい。

香港は「英政ヲ聞ク今ニ二十餘年然レドモ土人猶恢復ノ志アリ誠意心服スル者少ト云<sup>(47)</sup>」と、中国人の間にくすぶる英国支配に対する不満と抵抗の存在も見逃されてはいないが、「土人清人は英夷に耐し清朝の政廷を不聞英政を聴くこと凡二十年と云、是に清官吏一兩輩是港に留り併し其權英夷に奪れ木偶人の如しと云<sup>(48)</sup>」というのが動かし難い現実である。

このような「英夷」の跋扈をもたらした原因は何か。

それを中国自身の側の内因、とりわけ民情の頹廢と悪政に見出す発想が、しばしば見られる。

「民風都テ野鄙且狡猾也既ニ我邦人ヲ見テハ接近圍繞喧閥喋々トシテ耳邊ニ聳シク些ノ禮敬ヲ知ル無シ中ニハ貧婪無慚ノ者アリテ時ニ旅人ノ行李ヲ奪ヒ去ル事ナト儘之有由堂々タル大國ニシテ如今英夷ニ鞭撻驅使ヲウケ奴隸視セラ  
ル自ラ由ル所有也」<sup>(49)</sup>（市川渡）

「近来聖人之大道衰へ支那後世ノ徒聖賢ニ模擬スル者稍モスレハ固陋ノ見解ヲ持シ、古ノ英雄ヲ以自ラ比角<sup>トウ</sup>シ自己ノ伎倆万々及バサルヲ察セズ、妄ニ其志ヲ遂ゲント欲ス。彼ノ世人ノ論ヲ見ルニ彼ト我トノ長短ヲ議シ終ニ帰著スル処ナシ。雖然古今時勢ノ沿革啻天淵ノミナラズ。深ク怪ムベキニアラザルベシ」<sup>(50)</sup>（中井弘）

そして高島祐啓は香港見聞の記事を、「思ひきや 聖の国の民草も えみしの風になびくものとは」<sup>(51)</sup>という歌でしめくくっている。中井弘の「近来聖人之大道衰へ云々」という一節が、先に見た彼の「聖賢ノ大道衰へ云々」と問いかけた、中国人との問答に関連することは明らかだろう。そして「後世ノ徒聖賢ニ模擬スル者」への批判は、上海の項で見た中華思想への批判と共通し、「古今時勢ノ沿革啻天淵ノミナラズ」には、これまでに見た「宇内形勢之推移」やさらには「世界の開化」と共通するものを見出すことが出来るだろう。

### 3 シンガポールその他の寄港地で

上海と香港という中国が西洋に対して開いた二大門戸を離れた後も、ヨーロッパを目ざす船旅の日本人たちは、ヨーロッパ本土まで、なお西力東漸のあとをたどり、英仏両国の植民地の諸港に立ち寄り、各所で中国人とその社会に接し

た。それは、サイゴン、シンガポールに始まり、ペナン、ボンベイを経てアレキサンドリアまでにわたっている。それの港について一様に、「流寓」の中国人が貧しく、多くはホテルの給仕や小使から港の沖仲仕にいたるまでの肉体労働に酷使されていること、商人である場合も白人に比べれば店も住居もみすぼらしく汚ないことが記されている。

その中では、中国人社会が最も古く規模が大きく、碇泊の期間も比較的長く、上陸して中国人に接する機会も他所より多いのはシンガポールだった。そしてシンガポールでは、文久二年の竹内遣欧使節団は、もと尾張回船の水夫だった音吉と名のる日本人の訪問を受けている。彼は使節団のシンガポール到着の少し前まで長く上海に住んでおり、使節団の人々は、彼から太平天国の反乱をめぐる中国の政情について、最新の情報を聞き出している。<sup>(52)</sup> 太平天国軍については、西洋行の人々は、すでに上海でも香港でも事情探索につとめており、音吉が語るころは、そこでえられた情報と大筋で一致している。ただ注目に値するのは、新帝同治帝の統治体制についての見方である。音吉の談話を記すものの中には、益頭駿次郎のように、新しい政権について「當時支那の同治帝……咸豊帝の子にして其年七歳頗る英仏人民の望みを得たるなれば定て英仏も官軍に左袒すべく別て當帝を羽翼せは恭親王……は性廉直にして外国人も深く感賞せし人なりし」と積極的な評価を記すものもある。しかし、音吉の話をも詳しく生き生きと伝える高島祐啓の手記は、それとはかなり異っていた。

「清ハ先ニ咸豊帝崩ジ太子載淳即位同治ト改元ス然レドモ年終ニ八歳ニシテ自ラ國政ヲ執ルノ智ナク奸臣上ニ在忠臣下ニ埋ル因テ諸士賄賂ヲ以テ高官ニ登リ忠義ヲ忘レ君父ヲ後ニシ唯名利ヲ先ニスルノ徒ノミ故ニ民人志ヲ失ヒ遂ニ逃去英佛ニ救ヒテ請ヒ然シテ上海ニ入者凡ニ二百餘萬人英佛八百五十人ノ兵ヲ出シ長毛ガ兵三千人ト戦ヒ暫時ニ長毛五百人ヲ殺シ餘ハ逃去者幾數……ト上海戦争ノ凶並ニ同所地凶一枚ヲ持来リ頗ル委曲ニ辨述シタリキ」<sup>(54)</sup>

「清朝猶幼年年號を同治と改む今年元年也滿朝の人皆賄賂を以官に進み民を虚し豪傑の士ありといへとも不用可措

方今過半紅毛に合し亂を為すと云りよろしく鑑となすへきか<sup>(55)</sup>

というのと同じ様な理解だろう。同治中興期の恭親王の政權については、むしろこのような政府の腐敗と民心の離反というイメージがひろまつてゆくようである。

#### 4 船中にて

文久二年の幕府遣欧使節団のように、交渉相手国が用意した軍艦で旅したグループや、井上馨・伊藤博文ら長州藩士のように貨物帆船で水夫見習のようにして密航した者を除けば、西洋を目ざす人々は、上海か香港で英仏あるいはアメリカの「飛脚船」をつかまえるのがふつうだった。そして上海や香港を出帆した後、ヨーロッパに着くまで、特にスエズ以東の長い船旅がまた、中国人との出会いの場だった。長い船中の社会は国際社会の縮図であり、彼らはそこで、西洋の中に組みこまれた中国の現実と接して強い印象を受けるのである。

多くの旅行者が便船に乗込むごとにまず気づかされるのは、「船中ノ使役夫ハ總テ支那人ナリ墨（一アメリカ）夷等ハ見エス<sup>(56)</sup>」とか「水夫等大低広東人ニテ曲ヲ謡へ月琴ヲ弾スルヲ見ル<sup>(57)</sup>」という現実だった。そしてある者は、英国船に限つてインド人や中国人が使われていることに注目し、その理由についてこうのべている。

「當船も同マトロス共（是内支那人六人見たり）先船と同様印度人を用ゆ英船に於ては我國へ徳を付候様給金安き者を用ゆ佛船は法（一フランス）政府にて損を致し飛却<sup>ア</sup>するとの由し<sup>(58)</sup>」

「元（一これまで乗つて来た）佛船は丁寧にして且つマトロスに到る迄日本人に對し失禮なく皆丁寧なり當船はマトロス皆印度人を用ゆ其の内に英のマトロス只六七人而已是内に支那人五六人マトロスの内に居たり是は唐人にして亞

刺比亞亞弗利加の人に用ひらる我國を安すんずるの基也と存す<sup>(59)</sup>」

低賃金だから経済的「徳」——であり、かつ「我國を安んずるの基」なのだという認識が明らかだろう。このような低賃金で非熟練労働に使われる中国人水夫の状態は一行の目を惹いた。しかし中国人水夫についての記事の中で、最も激しい感情をこめて記されているのは、次のような出来事である。元治元年の池田遣仏使節団の帰途、一行の乗る英国客船が台湾海峡で、日本の千石積ほどの中国船が沈没に瀕し、二五・六人が助けを求めて叫んでいるのに出会った。船長は蒸気をおとして近寄り、ボートを下して助けようと試みたけれども、中国船の帆柱は折れて一本だけ残りふなべりも砕けて堤が切れたように波が打入る、「何分見ルニ哀レナル有様」を目の前にしながら、救助することが出来ず、結局見捨ててしまった。それも「水夫ハ支那人ニテ其取捌キ方甚タ手緩」いからで、「唯歐羅巴水夫ナレバ何トカ救助出来得ベシ」と聞いたというこの記事は、「邦人等彼舟の一帆檣残レルヲ願望シテ其情ヲ想像シ殊ニ憫然ノ情ニ堪ヘザリキ」と結ばれている。

船中社会のもう一つの中国人グループは船客であり、日本人船客は、彼らが船客として差別されるのを目のあたりにした。そして当の日本人船客は、船員のハイアラキーの中で最下層の中国人給仕や水夫からも不当な扱いを受けることがあった。

「満船中英人は甚だ權威あり。而して給仕の者迄も歐羅巴人は甚だ尊び能く使令に供するなれど日本人は一位粗略に扱ふ。實に残念なり。願はくば政府早く海軍を起し、我邦の飛脚船を製し、吾國の旅客を乗せ、四海に横行せば、旭章の御旗盛んなるべく、邦人の權威も生ずべしと日夜祈る處なり。又退き考ふるに方今御國威の海外に輝き居る事未だぐし。

「可驚哉彼の支那は如此の大國なれど一艘の軍艦を備へず一隊の兵卒なく迂濶譯詞を以て尊び居り、歐人に鄙まれ、

既に英の飛脚船などに支那人はいかやうの大金出すとも第一等の室に入るを許さずといふ。此度上海の支那領を訪れ見るに其の風俗季世の故か、只々乞食様の者のみ多く、人物みな迂愚の容貌を顯はせり。上海城など城壁破壊し、一發の弾丸を以て容易に之を抜くを得べし。

依而考ふるに、亞細亞洲中の各國、海外に横行すべきものは只獨り日本のみ。余思ふに二三十年の後、東方の大島一つの歐羅巴を生ずべしと。<sup>(6)</sup>

「多人数乗込水夫大形支那人也。日本人ヨリ被使候コト甚嫌フ、故ヲ以考フルニ日本武不振ヲ思ヒシル一日モ早く不問アラス」<sup>(62)</sup>

ここに見られるのは、中国人や日本人が船客として差別待遇を受けるのは、中国や日本が国家として軍事的に弱少なためであるという現状理解と、日本はそのような惨状から脱出するために海軍と商船隊を興して「国威」をあげよという提言である。現状認識においても提言においても、個人の屈辱と名譽とが国家のそれと同一化するという思考が両者に共通していることがうかがわれよう。(未完)

一九八七・一一・一七

## 注

(1) 小論は、拙稿「西洋『探索』と中国(一)」、『北大法学論集』第二九卷第三・四号(一九七八年)の続稿であるが、この論文の発表後あまり長く経つたので、別個の論文の形をとった。小論で前稿とは右論文をさす。

なお小論に引く日記・書簡等の日付は全て原文に付された陰曆のそれである。

(2) 池田長発使節団に定役として隨行した記録「奉使日記」。土屋喬雄他編『杉浦讓全集、第一卷』(同刊行会・一九七八年、以下「杉浦I」と略す)一七六頁。杉浦はこの翌年元治二(慶応元(一八六五)年三月から翌月にかけて、上海における長

州藩の密貿易について調査するため上海に派遣され、さらに慶応三(一八六七)年、パリ万国博使節の随員として渡欧、長短あわせて五回上海を訪れている。慶応元年の上海行の際には「上海探索出張復命書」「中国貿易調査書」の二篇を残しており、いずれも「杉浦讓全集・第一巻」に収められている。

なお幕府は、この慶応元年の調査団のほか、中国との貿易および条約締結の可能性を探るため、文久二(一八六二)年、元治元(一八六四)年、慶応三(一八六七)年の三回、合計四回にわたって、上海に調査団を派遣した。この三回のいずれについても公私の記録が残されており、特に文久二年の官船千歳丸の一行のそれは質量とともに豊かである。小論に登場する杉浦愛蔵、五代友厚、名倉予何人や、その他小論ではふれられないが西吉十郎、森山多吉郎、小出千之助らなど上海派遣と西洋行と両方の経験を持つ者があり、上海派遣使節の上海経験と西洋行グループのそれとの関連や比較は興味深いところでは省略する。なお千歳丸の上海派遣と見聞記録についての最近のゆき届いた研究として、春名徹「一八六二年 幕府千歳丸の上海派遣」田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』(吉川弘文館、一九八七年)所収、がある。

(3) 『杉浦一』三五九頁。

(4) 『航海日録』(会津若松市立会津図書館蔵自筆稿本)元治元年一月六日の項。佐原盛純は、金上佐輔と名のり、正使池田長発の従者となって遣仏の一行に加わっている。

(5) 同前七月一三日の項。

(6) 杉浦「前掲」(注2)一月六日の項、「杉浦一」、二二六頁。

(7) 『航西日記』『日本史籍協会叢書・渋沢栄一滯仏日記』(東京大学出版会、一九六七年、以下『渋沢』と略す)九一〇頁。

(8) 坂野正高『近代中国政治外交史』(東京大学出版会、一九七三年)一九一―一九二頁参照。なお Paul Cohen, "Christian Missions and their impact to 1900," in J. K. Fairbank ed., *Cambridge History of China* Vol. 10, Cambridge U. P., 1978. が在中宣教師の文化的活動とその背景をなす宣教師団体の活動全般についての、近年の包括的研究として有益である。またこれらの「ミッシヨナリ・シノローク」の個々の経歴や彼らの中文著作とその日本への流入および日本版について、詳細正確な点、今日においても小沢三郎『幕末耶穌教史研究』(垂細垂書房、一九四四年)をこえるものはなく、これらの書物の日本での読まれ方と影響については、増田涉『西学東漸と中国事情』(岩波書店、一九七九年)が役立つ。

(9) 拙稿『西国立志編』と『自由之理』の世界』日本政治学会編『日本における西欧政治思想』(岩波書店、一九七六年)一

三、二一頁参照。

(10) 元治元年正月一三日付河田相模守・河津伊豆守・池田筑後守連署の陸軍奉行衆あて書簡。および同一二日原田吾一の藤沢肥後守・川勝光之輔あて書簡。『日本史籍協会叢書・川勝家文書』（東京大学出版会、一九七〇年）一一五頁。なお杉浦愛蔵の『奉使日記』正月一三日の項（杉浦Ⅰ一三〇―一三二頁）をも参照。

(11) 幕府の英国留学生団取締役川路太郎の日記『英航日録』慶応二年一月一日の項、川路柳虹『黒船記』（法政大学出版局、一九五三年）一六五頁。

(12) 渋沢「前掲」(注7)『渋沢』八頁。

(13) 「英航日録」、川路柳虹「前掲書」(注11)一六六―六七頁。

(14) 原平三「徳川幕府の英国留学生」、『歴史地理』七九巻五号、一九四二年、

(15) 「航海日記」慶応三年正月一六日の項、『杉浦Ⅱ』四五―四六頁。

(16) 佐原「前掲」(注4)元治元年七月一日の項。名倉は、文久二年千歳丸の一行に従者として加わり、『海外日録』、「支那間見録」『瀛城筆話』、『瀛城筆話拾遺』を残した(いずれも影写本が京都大学文学部国史研究室に所蔵されている)。名倉の記録は量質ともに同行メンバの記録中群をぬいており、かつ、春名徹氏によれば、一行の記録の中で同時代に流布したのは、おそらく名倉の記録だけである。春名「前掲論文」(注2)五九四頁。

(17) 川路柳虹「前掲書」(注11)一六五頁。

(18) 「仁礼景範航米日記」、『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』第二三号(一九八四年)六四頁、慶応二年四月二日の項。

(19) 渋沢「前掲」(注7)『渋沢』一〇頁。

(20) 「海軍中将松村淳蔵洋行談」、『薩藩海軍史 中巻』(同刊行会、一九二八年)一九九頁。

(21) たとえば杉浦愛蔵「前掲」(注2)『杉浦Ⅰ』一七六頁。

(22) 「欧行記」、『日本史籍協会叢書・遣外使節日記纂輯三』(東京大学出版会、一九七一年、以下K S IIIと略す)一三四―三五頁。

(23) 同前三三七頁。

(24) 文久四年一月一八日付、『杉浦Ⅰ』三六一頁。

- (25) 「前掲」(注2)『杉浦I』一七六頁。
- (26) 「帰朝雑誌」『杉浦II』八四頁。
- (27) 文久二年の竹内遣欧使節団の副使松平康直の従者市川渡の日記「尾蠅欧行漫録」KS III 五五六頁。
- (28) 文久遣欧使節団に随行した医師高島祐啓の日記「欧西行記」(国立国会図書館蔵自筆稿本) 文久二年正月七日の項。
- (29) 文久遣欧使節団随員洲辺徳蔵「欧行日記」文久二年正月一五日の項、KS III 一三頁。
- (30) 同二月一日付市川渡の大槻盤溪あて書簡、『日本史籍協会叢書・夷匪入港録』(東京大学出版会、一九六七年、以下IN Iと略す) 一九七頁。
- (31) 「前掲」(注28) 文久二年一月七日の項。
- (32) (注30)に同じ。
- (33) 市川「前掲」(注27) 二八〇—八一頁。
- (34) 佐原「前掲」(注4) 元治元年七月五日の項。王韜についてはPaul Cohenのすぐれた評伝 *Between Tradition and Modernity: Wang Tao and Reform in China*, Harvard U. P., 1974を参照。
- (35) Cohen, *ibid.*, p. 61.
- (36) 川路柳虹「前掲書」(注11) 七〇頁。
- (37) 同前一九八頁。
- (38) 益頭駿次郎「前掲」(注22) KS III 一三四頁。
- (39) 渋沢「前掲」(注7)『渋沢』一三頁。
- (40) 文久二年二月一日付大槻盤溪あて書簡IN I 一九六頁。なお「尾蠅欧行漫録」は、ホテルに訪ねて来た羅森に「誠中和正」と書いてもらったと記している。KS II 二八二頁。
- (41) 「前掲」(注28) 文久二年一月七日の項。
- (42) 高島の日記「欧西紀行巻二十」。写本で、高島の旅先からの書簡を集めた「浪のおとづれ」(写本)と合冊されている。国立国会図書館蔵。なお羅森から「東洋行紀」を贈られた高島は、これを自分の「欧西行紀」に収録する計画だったようだが、現存の稿本には入っていない。日本の士人との筆談の記録を含む「日本紀行」は、現在『大日本古文書・幕末外国関係文書』

「附録之一」に収められている。

(43) 「柴田剛中日載」沼田次郎・松沢弘陽校注『西洋見聞集』(岩波書店、一九七四年)二六九頁。

(44) 羅森の来日と日本士人との交歓および「日本紀聞」の写本による流布については、増田渉『藩清紀事』と『奥匪大略』および『藩清紀事』とその筆者(いずれも増田「前掲書」(注8)所収)に詳しく、加藤裕三『黒船前後の世界』(岩波書店、一九八五年)一一八一―一九、三五五頁および市古宙三『近代中国の政治と社会(増補版)』(東京大学出版会、一九七七年)一〇九―一二頁にもふれられている。

(45) 「航海新説」『明治文化全集 外国文化篇』(日本評論社、一九六八年、以下GBと略す)二八二頁。

(46) 同前二八一頁。

(47) 高島「前掲」(注28)。

(48) 益頭「前掲」(注22) KS III 二八頁。

(49) 市川「前掲」(注27) KS II 二八二頁。

(50) 中井「前掲」(注44) GB 二八五頁。

(51) 高島「前掲」(注28)、文久二年一月一〇日の項。

(52) 尾張国小野浦村の水夫音吉―乙吉とする記録もある―の生涯を刻明に辿った、春名徹『につぼん音吉漂流記』(晶文社、一九七九年)は、音吉を軸にして幕末の日・中・西洋の交渉を考えるのに有益である。なお同氏は、元治元年の池田使節団も音吉に会っているとして、「田中廉太郎氏の書翰」『旧幕府』一巻二号(一九九七年)を引かれるが、この表題の下にまとめられた手紙二通の中、音吉との談話を記すものは、注(54)でふれる高島祐啓の書簡とほとんど同文であり、『旧幕府』の編集上の手帳がいで、高換の書簡が池田使節団随員の田中のそれととりちがえられたものと思われる。

(53) 益頭「前掲」(注22) KS III 一四三頁。

(54) 高島「前掲」(注28) 文久二年一月二〇日の項。なお高島は、これと同趣旨の手紙を、二月二一日に、日本に送っており、写しが「浪のおとづれ」(注42参照)にあるほか、発信人の名を欠いているが、INI二〇三―二一〇頁にも収められている。

(55) 「役々召連」となって参加した加賀藩士佐野鼎の正月晦日付三浦八郎右衛門あて書簡、INI一九〇頁。

(56) 佐原「前掲」(注4) 元治元年七月六日の項。

- (57) 同前、七月九日の項。
- (58) 池田使節団副使河津祐之の従者、岩松太郎の日記「航海日記」元治元年六月一九日の項 K S III 四七七頁。
- (59) 同前、六月四日の項 K S III 四六七頁。
- (60) 佐原「前掲」(注4) 元治元年七月七日の項。
- (61) 川路「英航日録」川路柳虹「前掲書」(注11) 一六八―六九頁。
- (62) 仁礼景範「前掲」(注18) 六八頁。慶応二年四月二七日の項。

## The Japanese Missions' Encounter with China on their Way to the West, 1862-1871 ( I )

Hiroaki MATSUZAWA\*

During the last decade of the Bakufu rule, i.e. in the eighteen-sixties, the Bakufu and rival feudal lords sent many envoys and student groups to Europe and the United States. Although these missions to the West were originally organized as reconnaissance tours to Western 'barbarian' countries, they had a chance on their way to meet China as well. As a result, the Japanese travelers not only changed radically their view of the West but also developed a new understanding of China. More importantly, their changing view of the West and that of China were closely interrelated.

At that time China was experiencing dual cross-cultural movements. While facing invasion of Western culture into its mainland, its people were beginning to stream out to Hawaii, the Pacific coast of the American Continents, and South East Asia. Thus the development of Western settlements such as those in Shanghai and a colony Hong Kong on mainland China proceeded almost simultaneously with the growth of Chinese communities in foreign countries in the above mentioned areas. Most Japanese missions to the West in the eighteen-sixties traveled by Western steamers and along one of the two routes of the Western expansion to Asia, one via Hawaii or the other via Western colonies in South East Asia. Consequently, the Japanese missions for the West encountered Chinese people and Chinese culture not only at open ports and a colony on the Chinese coast but also in Western colonies in South East Asia. Furthermore the long voyages provided those Japanese with ample opportunities to witness the conditions of Chinese passengers and sailors in Western ships. Even during their stay in Europe and the United States, they came across some Chinese people, Chinese things and information about China.

What the present author intends to investigate is as follows : where and what did the Japanese see and hear of China ? ; from what perspectives ? ; through what kinds of sources did they obtain information about conditions in China ? ;

---

\*Professor of History of Japanese Political Thought

how did they interpret their own experiences and their acquired information about China ? ; how was their perception of the West as well as China transformed thereafter ? ; and, finally, in what way their new changing perception of China would mould Japan's attitude and policy towards China in early Meiji years ?

After surveying the case of the first Japanese envoy to the United States in 1860 in his former article (*The Hokkaido Law Review*, Vol.29, No.3=4), the author in this article investigates the cases of the Japanese missions to the West from 1862 to 1871. In the first part of this article (*The Hokkaido Law Review*, Vol.38, No.5=6) the Japanese missions' experiences at Shanghai, Hong Kong and on board are to be examined.

Japanese travelers were shocked by a striking contrast between the Western settlements and the colonial rule on the one hand and Chinese communities on the other; wealth, power, order, and cleanliness vis-à-vis poverty, weakness, disorder, and filth.

They grieved over the reality of the Western predominance over and exploitation of China. Yet they tended to assign the main reason for the reality to the victim and to blame the Chinese government and people for their decadence.

What is significant in this context is the activities of Western 'missionary sinologues', who offered insightful understanding of China. As Japanese Confucian scholars were especially impressed by what they thought to be a serious paradox : 'Western barbarians' were keener and abler to understand the teachings of the sages of the Middle Kingdom! Some of the Japanese travelers happened to meet pioneers of the Chinese reform movement (洋務 Yang-wu), which was emerging under the Western influences in littoral China. The Japanese travelers, however, were too much impressed by Western superiority to pay due attention to such new developing aspects of China.